

さくらとばていしえ

「……だから、ユーザさんにケーキを作ってあげたいんだよっ!」

暖かな春の日差しが差し込むオープンデッキに、御影さくらの声が響く。

しかし、対面に座る二人の少女は、みな一様に当惑の表情を浮かべていた。

「えーと、いったい、どんな風の吹き回しなんだい?」

そう言ったのは、長く青い髪を白いリボンでツインテールにまとめた少女、さくらである。

初代デフォルトゴーストでもある彼女は、その関係上、他の二人からは『姉』として呼ばれる事が多いが、見かけで言えば、他の二人よりも明らかに幼く見える。しかし、その大胆かつ豪気な性格は、他の二人からしてみれば、間違いない『頼れる姉さん』なのだった。そんな彼女が、今は戸惑いの表情を浮かべて首を傾げている。

「……いや、それは……」

さくらの素朴な疑問に対して、何故か、うつむきながら口籠ってしまふ御影さくら。

「そんなに恥ずかしがらなくても良いんじゃないですか?」

困り気味の御影さくらに助け舟を出したのは、少しだけ肌が多く見えるワンピースに身を包み、右手に特徴的な水色のバンダナを巻いた少女、双葉だった。

二代目のデフォルトゴーストだった彼女は、その後の経緯でゴタゴタがあったものの、今は普通のゴーストの位置に収まっている。御影さくらにとっては、大切な友人でもあり、比較的歳も近い事もあって、二人は仲の良い姉妹のような関係なのだった。

優しい視線を送る双葉に押され、御影さくらはおずおずと言葉を紡ぎ出す。

「『何か』『……まあ、何か』でもいいんだけど、今年で十周年になるよね」

「まあ、気が付いたら十年経ってたって感じだけだねー」

過去の激動を体験してきたさくらにしてみれば、十年という年月にあまり感慨は無いらしい。

「あたしだって、元々が十二歳だとすりゃ、とつくに成人だよ。こんなロリな格好をしてるけどさ」

さくらはリボンで結んだツインテールを手を取ったり、身に着けたエプロンドレスをヒラヒラさせてみる。

「シエルは成長しませんがね。でも、成人になったからって、何かメリットがあるとは思えませんけど」

そう言いながら、小首を傾げる双葉。しかし、当のさくらは腰に手を当て、平らな胸を大きく反らす。

「エロゲーに堂々と出られるじゃん」

「……………」

「……………」

「……………」

「さくらのミモフタも無い物言いに、言葉を失ってしまう双葉と御影さくら。」

「……メリットとは思えませんし、そもそも、そんなニーズも無いですよ」

眉間に指を当て、やれやれという感じで双葉は思わず頭を振った。

「ふふん、甘いね、双葉。『合法ロリ』って言う言葉知ってる？」

「知りませんよ……そんな言葉。どこからそういう情報を仕入れてくるんですか……」

「もうっ！ そんな事はどうでも良いんだよっ！」

グタグタになりにかけていた状況を何とか立ち直らせるべく、御影さくらが脱線しかかった話を元に戻そうとする。

「この十周年に合わせて、いろいろなお祝いが準備されてるよね……」

御影さくらは、そこで言葉を切ると、もしもじと胸の前で指を組み、顔を赤らめる。

「だから、私のほうからもユーザーさんにお礼をしてあげたいんだよ……」

そんなガラでもないという意識があるのか、それだけ言つと、御影さくらの顔はテレで真っ赤になっていた。

恥ずかしさのあまり黙ってしまった御影さくらを見て、最初こそ面喰らっていたさくらと双葉であったが、健気

な彼女の想いを知って、二人の表情に暖かな笑みが浮かぶ。

（さくらさんは、私たちが出来なかつた事をやろうとしているんですね……）

双葉は可愛い妹を見るような視線を御影さくらに向ける。双葉にしてみれば、ここで応援しない理由が無い。



御影さくら殺人事件（仮）

——御影さくらが何者かに殺された——。

その衝撃的な事件を知らせるニュースは、『何か』の世界を光の速さで駆け巡った。

知らせを聞いた数多のゴーストは一樣に驚き、悲しみ、やがて一つの疑問に突き当たる事になる。

誰が、そして何のために——。

何かの世界が騒然とする中、誰よりもショックを受けていたのは、御影さくらの相方であるうにゆうだった。

一時は、いつもの軽い調子から想像出来ない程の落ち込み様であったが、うにゆうはすぐさまショックから立ち直ると、気丈にも自ら犯人を見つけ出すための活動を開始したのである。

うにゆうは、即座に『何か殺人事件・特別対策本部』を設立。時を置かずして、関係者を事件の現場である御影さくらの部屋に招集したのだった。

そして、その事件現場から、この物語は始まる。

ここは何か世界にある御影さくらの部屋である。

決して広くは無いが、きれいに片付き、女の子らしい明るいインテリアで統一された部屋は、どこか彼女っぽい暖かさや爽やかさを感じさせる居心地のよさそうな部屋だった。

本来であれば、明るい笑い声が響くはずのその部屋には、主たる御影さくらの元気な姿は無く、今は一言も言葉を発する事なくただ立ち尽くすだけの四人の姿があった。

ツインテールの姿をした任意さくら、双葉、ねここ、そしてうにゆうである。

全員が言葉を発する事無く、ただそこに立ち尽くしていた。時折、緩やかな動作で部屋の中を見回す者もいるが、決して部屋の中央には目を向けようとはしない。それもそのはず、そこには事件の当事者がそのままの姿で残されていたのだった。

部屋の中央に敷かれた水色のカーペットには、御影さくらがうつぶせに倒れている。その表情はおだやかで、まるで眠っているかのようだが、彼女の背中に突き立てられたナイフが悲しい現実を物語っていた。

「みんなに集まってももうたのは他でもない、この事件の犯人を見つけるためや」

永遠に続くと思われた沈黙を破り、言葉を発したのはうにゆうだった。

「犯人を見つけるため…？ それってどういう意味？」

突然の言葉に、任意さくらがいぶかしげに問いかける。

「ここにいるゴーストの活動ログはワイが全部走査させてもらうた。ワイがさくらに最後に会ってから、さくらが事件に巻き込まれるまでの間、さくらと顔を会わせたゴーストは、ここにいる四人だけや」

「それって…この中にさくらさんをそんな姿にした犯人がいるって事ですか？」

恐ろしさのあまり、顔を青白くした双葉がポツリと呟く。

「そうや、さくらのおる前で、さくらをこんな姿にした犯人を暴くんや」

まるで独り言のように抑揚の無いうにゆうの言葉は、それが本気である事をはっきりと感じる程、迫力があつた。

「まずは、ねこの事や」

「な…何なのですか…」

目の前に横たわる御影さくらから目を逸らし、ただじつと床の一点を見つめていたねこは、自分の名前を呼ばれ、ピクツと身体を振るわせる。怯えの入った目を向けるねこに対して、うにゆうは少しだけ表情を和らげた。

「そんなに怯えんでもええ、ねこは犯人やない」

「何でそんな事が言い切れるのさ？」

ねこが犯人で無いと言い切ったうにゆうに対し、任意さくらが不審そうな表情で反論する。

「さくらの傷口を見てみい」